

昭和二十九年七月二十五日發行(毎月)回十五日發行
第三種郵便物認可

(通第六十八号)

慈

光

第六卷

第十一號

目

聖人に会ひまゐらす道……………花田正夫(1)

大經上卷全体の感じ……………福島政雄(5)

酒見先生の御手紙……………西原礼藏(8)

正信偈意識……………三瓶徳英(13)

次

聖人に會ひまゐらす道

花田正夫

池山先生の晩年、丁度昭和七、八年の頃でありました。京都の高倉會館で、東本願寺の報恩講中に特別講話をせられたことがありました。時しも報恩講のこととて全国の信徒の方々が各地から京都に参集してゐて、會館では平素見馴れぬ珍しい顔ぶれの人々も多く、會堂はあふれるばかりの群参でありました。その時、

「皆様方はひとへに聖人の御恩にひかれて、はるばる全国各地から上洛せられたのでありませうが、さて親鸞聖人にほんたうにお会ひになりましたでせうか。若しさうでないとなればまことに残念なことであります。またお会ひされたとすると、何時！何処で！」

と言葉はおだやかな調子でしたが、眼光は炯々と輝き、御自身は、南無阿彌陀佛、々々、々々、と念佛して居られました。やがてまた語を継がれて

「御本山の御影堂にお参りしたり、大谷の御廟にお詣り申すことも、結構なことではありますが、それだけで聖人にお会ひ出来たといふものではありません。それは形にお会ひすること、形は人ではありません。人とは心です、したがつて、心と心とがひとつにとうけあふ、そこにほんたうにお会ひ申すことが出来るのです云々」

「私は幸にも四十二歳の時、數異抄の第二章「親鸞におきては、ただ念佛して……」のところ、聖人にお会ひさせて頂きました。

爾來今日に到りますまで、私の心の隅々、心の岐路とでも申しますところには、何時も聖人が立つてゐて下さつてそつちぢやない、こつちを行くん、と指南と照護を常に蒙つて居ります云々」

と御自督を述べられたことがありました。その時からす

でに廿年あまりも過ぎ去りましたが、その時の異様な輝きを持たれた御顔や、御言葉の端々までが、今なほ私共の眼の裡、耳の底に、不思議にも強く残つて、忘れられない想ひ出となつて居ります。

四国の故鎌田晃氏の、先生追悼の挽歌に

信仰は時と処を超えさする尊きをしへ師にしらせき

聖人と七百年をへだつれど会はれうるぞと師はのたまへり

百年を七たび重ね來ぬれども祖師聖人に会ふぞうれしき

と詠じられて、先生の御信証を特に深く渴仰せられたのも思ひあはせられます。

ほんたうに會ふとは

形に會ふことがほんたうに會ふことではなく、心と心とがひとつにとうける、そこに人と人との相會ふ道がひらけるのであります。

然したとへ互に意氣投合し、幸に肝膽相照すといふ情懷を惠まれたといいたしましても、無常の人生のこととて、内

に外に種々雑多の転変を繰返します時、常恒の友誼を必ずしも保ち難いのであります。そこに断金之交、刎頸の契にも「會ふは別れの始め」といふ淋しく暗い影が射し添うて居て、やがて崩されて了ふのであります。

私自身、満四年、痼疾に障へられて、蓬戸を閉ぢた生活を續けて居ります。これから先のことも恢復といふことの許されぬ状態で居ります。さうした日暮しを致して居りますと、時々お会ひ申し度い信友や知識の方々を憶ひ浮べ、たまらない心になります。

會ひたいが會へない、會へないけれど會ひたい！さうした強烈な心のチレンマに落ちた拳句に、さてほんたうに會ふといふことはどういふことであらうかと考へさせられます。

現在、會へたとか、會へぬと云つて、或は喜び、或は悲しんでゐるが、結局それは會者定離の嵐の前に崩れ去つて行く。一度お会ひして永劫に別れることのない會ひ方、さう云ふ會ひ方は地上では願つても得られないことであらうか。何といふ味気ないことか、何といふ淋しいことか、暗い孤独の淵に落ちこむところ、その涯底から浮び出て下さるのがお念佛であります、そしてそこに

恋しくば 南無阿彌陀佛を称ふべし

われも六字のうちにこそすめ

の思し召を頂き、俱会一処の喜びを恵んで下さるのであります。

法然上人伝の十六門記に、上人御流罪の日の御詞を次のやうに誌されてあります。

「月輪の禪定殿下、しばらくの御別離の恨を息んが爲に法性寺の小御堂に、上人を一夜逗留たてまつられけり。その時上人のたまはく。

会者定離は常のならひ、今はじめたるにあらず、何ぞ深く歎かんや。宿縁むなしからずば、同一蓮に坐せん、淨土の再会はなほだ近きにある。今の別離はしばしの悲しみ、春の夜の夢の如し。信誦ともに縁として、先に生れて後を導かん、引攝縁はこれ淨土の樂なり。

夫れ現生すら猶もてうとからず、同一名号を唱へ、同一光明の中にありて、同じく聖衆の護念を蒙る。同法もつとも親し、愚にうとしと思し召すべからず。

南無阿彌陀佛と唱へたまへば住所はへだつといへども、源空に親しとす、源空も南無阿彌陀佛と唱へたてまつるが故なり。念佛をくさびとせざる人は、たとへ肩をならべ、膝をくむといへども、源空にうとかるべし、三業みなことなるが故なり。

に憐みまします大悲の至極の念佛であります。親と生れ、子と生れ、友となり師となり、深い御縁に結ばれた身も、やがてまた紅葉のやうにハラハラと散り別れて行く者に「今生夢のうちのちぎりをするべとして、來生さとの前のえにしを結ばんとなり。われおくれなばひとに導かれ、われ先だたば人を導きて、世々に知識となり、生々に善友となりて、ながく迷執を断たん」との無二の志願を満足して下さるのであります。

会者定離の嵐の前に、愛別離苦の涙にぬれて、独生独死独去独來のはてしない荒野を辿る者に、如來聖人の呼びます声がひびく、そして南無阿彌陀佛が浮び、そこに源空上人がましまし、そこに親鸞聖人もまします。維摩方丈の空室に十方より聖衆が雲集する趣があります。

私は自分が頑健で走り廻つてゐた頃は、呼び声とか、文字といふものを非常に軽く視て居りました。然し肉体のもつ力の範囲、そのはかなさを知らされるに及びまして、文字のもつ生命の長さ、言葉のもつ力の強さに驚異の眼を見張ると共に、佛は「音声法」をもつて尽未來際まで衆生を救済して下さることの重大さに気付きました。

はてしない生死の苦海に沈みきつて浮ぶ瀬のない者を、

上人かくのたまふに、禪定殿下、悲哀こころを迷し、一言ものたまはざりけり」

八句に近い老上人が遠く四国に御流謫の日、恐くは今生の再会を期し難しと深く諦観せられる御心から迸り出た金言であります。

同一念仏 無別道故

「たとへ肩をならべ、膝を組んで暮すとも、念佛をくさびとしない人は、源空にうとい人であり、それにひきかへ同一念佛の人々はたとへ百里千里、十年百年と、へだてて居ても、念佛の徳として、四海兄弟、俱会一処の恵みを蒙り源空にもつとも親しい人である」と上人は仰せられました。

かくて人間相互の離合集散はそのままに、尽十方の無碍の慈光下の対面、そこにこそ一度会うて永劫に別れぬ、ほんたうの会ふ道が成就せられるのであります。然しその念佛は、会ひたい会ひたいの願ひをかなへて貰ふために申す念佛ではない、さういふ願ひはどうして見てもかなふことは出来ない、顔が異なるやうに各自の業が異なり「別離久長にして相会ふこと難し」であります。さう云ふ境界から微塵もどうにもなれない煩惱の身を、かねてしるし召し、こと

照覧まします佛陀の、とどめようとしてとどめることの出來ず、見捨てようとしても見捨てることの出來ぬ、やむにやまれぬ悲心のこと、おのづから名告り出て下さる。音声法の上に建現して下さるのであります。それがそのまま佛陀の久遠のお生命であり、八十年の肉身の佛の御生命は、名告り出て下さる眞実、生きた御眞実とは比較にならぬはかなさを知らされ、三千年の今日、佛陀に直面させて頂く道は、佛陀の名告り出て下さる御名、南無阿彌陀佛の廣大無辺な御力の中に成就されるのであります。その御名のひびくところ、兩聖人は莞爾としてそこに寄り添ひ給ひ三千年、七百年、といふ時間と、印度、支那、日本といふ場所を越えて、一度会うて二度と別れることのない道がそこにひらけるのであります。

法のみ山の楼花 昔のままににほふかな

鷲のみ山の時鳥 昔のままにうたふかな

「親鸞におきては、ただ念佛して彌陀にたすけられまらすべし」とのよき人の仰せに、久遠の眞実に会ひ、廣大無辺の徳海を仰ぎまらすこととあります。そこに沈む夕陽を呼びもどす不思議さがあらはれて時を超え得るのであります。

大經上卷全体の感じ

福 島 政 雄

三 誓 偈

四十八願が終りましたところに、三誓偈、或は重誓偈と申されるのがあります。主な誓が三つありますので三誓偈と普通申されてをりますが、その御誓の第二番目に

『我無量劫において、大旋主となりて、普く諸の貧苦をすくはずは誓つて正覺を取ぜし』

とあります。自分は限りのない時に渡つて大きな旋し主となつて、貧乏で苦しんでゐる衆生を救ふことが出来ないならば自分は正覺を成ぜじ、自分にそれが出来ないならばさとりをひらいたとはならない、と述べられてあります。

ここに佛の広大なまことが、ことに今日の社会の大きな社会問題となつてをります一面について、問題をそこに出して、そして佛のまことをもつて何処々までもそれを解決したい。貧といふ苦しみを解きたいといふ願が出されてあります。

ところがどうでせうか、今日は社会科学、ことにマルクス主義が大分さげられてをりまして、そのマルクス主義について私は何もまとまつた研究はしません、つまりめざすところは、この社会に貧をなくしたい、かういふところを目指してゐると想ひます。経済を整へ平等な社会を作り出すと、この世に貧乏がなくなる、すると理想的に行くだらう、そのためには共産制をしかねばならぬと申して居ります。

さてこの經文の誓に『諸の貧苦』とありますのは、サア経済だけの貧苦でせうか。いやむしろ、もうすこし深い広い意味ではないでせうか。

一体我々社会の問題が経済的に平等になればうまく行くかといひますと、これは問題であります。たとひお互に金錢に困らなくなつたといつても、それだけで社会が平穩無事には行きません。世間普通にも「貧すれば貧する」と申します、貧乏すればむさほるものであります。それであ

れば貧が無くなれば貧が無くなるか、貧乏でなくなると欲がなくなるかと申しますと、決してさうは参りません。

我々は八万四千の欲がある。財産欲はその一つであります。この八万四千の欲をまとめて五欲と申します。財欲・色欲・食欲・名欲・睡眠欲であります。かやうな欲がありますので、財産の問題が経済的に整へられると他の欲がおり合うて行くかと申しますと、決しており合うて来ない、毎日のやうに新聞に男が女を殺し、女が男を害する問題が出ますが、それは財産がうまく整へられてもそれはうまく行かぬ。その上に食ひたいと云ふ欲、これも財産が平等になつたから食欲も平等になるかといへばそうはいかぬのであります。うまいものを食ひたい、人の食べないものを食ひたい、そして一方が満足されると、進歩すると申しませうか、墮落と申しませうか、譬へば一應よい御飯が食べられると今度は副食物の珍しいもの、おいしいものがほしいとなる、そこに不平等があらはれて、争ひがおこるのであります。なるべく人の食べないうまい物を食ひたいと食がござつて来て、更に男女の欲に惑うて行きますと家も民族も駄目になり、遂に滅亡すると申します。

次に名誉欲であります、これも私共につきまとふものであります。名誉欲などは無いと思つてゐる人も存外持つてゐるものであります。成程外形的な名誉を欲しがらぬまでも、自分の知人や社会によい名が知られたいといふ名

誉欲もあり、これが段々増長して行くものであります。皮肉な言ひ方ではありますが、要らないと言つてゐる間が一番ほしい時であります。私もお恥しいことです。青年の頃、広島に勤めてゐました時博士などいらぬ、論文など書かぬと言つてゐましたが、西先生がさういふことを言ふものではない、早く書きなさいとしきりに勧めて下さるので、とうとう書きました。ところがその論文を審査して下さいました吉田先生が非常に好意を持つて下さつて、半年位で論文を通してもらひました。ところが始めに学位などいらぬと云つて居りました私が一番よろこんだのであります。さうでありますからあれはいらぬ、これはいらぬといふのは、実はそれが一番ほしいのであります。最近話題になつて居ります某氏が博士をかへすとかかへさぬとか言つて居りますが、あれもさうだと思ひます。自分の心で人を推しはかるのは申しわけないことではありますが、私共は何処までもいつこい名誉欲があるのであります。

最後の睡眠欲、これは大事なものであります。ねむたいねむたいの欲はつきもので、この欲をおさへて了ふわけにはいきません。二晩も眠りませんと大変であります。

諸の貧苦を救ひたいといふのは、マルクス主義のやうに財産・経済の上だけの処置では、他の四ツの欲は未解決となります。そこで財産ばかりでなく名誉でまづしい、結婚

絶対他力と体験

池山榮吉著

十一月八日の池山先生の十七回忌を前に、丁子屋から出版されました。先生が四十二歳で獲信せられて数年後に出来た書であります。その信心の智慧の光に世間の苦相を描かれ、そこに無倦の大悲を感得され、御自身も亦「我聞如是」の項でその体験を表白して居られます。

姫路から六高に来てゐた学生がありました。姉さんが肺疾で段々悪化し、遂に死を自覚せられ、弟でありながら何一つ慰めてあけることの出来ないことに行き詰り、岡山の下宿に帰つても落ち着けず、転々と苦悶して居りました。池山先生の本書を教へられ、姉の枕頭で繰り返して読み続けましたところ、姉さんの心が大きいひらけて、念佛を申すやうになり、親兄弟にも御礼を申してやすらかに往生せられました。

誠に佛陀の大悲のあふるる書であり、皆様にお勧めいたします。

定価二百二十円。送料三十二円。発行所、京都市下京區油小路通花屋町上ル丁子屋書店。振替京都一四五〇番。

しても貧しいといふことになつて、五欲のどこにも貧しさを感ずる、さうした現実の貧しく苦しい有様を佛のまことは、あらゆる方面を徹底的に救ひとけたいと誓はれるのであります。その佛のまことによる救ひは、五欲にさまようて離れない私に、きびしく離れよと申されるのでもなく、またそのまゝで仕方がない、そのまゝでよいでもなく、汝を何処までも理解する故に、汝を限りなく憐れに思ふと言ふまことを、私のいのちに注いで下さる、そこに私の救ひがあると思つて居ります。財産が思ふにまかせず、うまいものが食べられなくても、また他の欲が存分にかかなくとも、欲ばかりの私、苦ばかりの私を何処々々々までも哀れみ給ふ佛のまことにふれると、苦しい中に一つの落ち着きを與へられて来るのであります。そこに佛のまことの私に及んで下さる力がある、これは非常に静かな力であり、今欲をおこして苦しんでゐる時に、その欲を捨て、了へといふのであればそれはさしがしいものであります。私に苦しい中にも一つの落ち着きを與へて下さる力は、何処から来る力ともなく私の生命に染み徹つて、苦しいなりに落ち着けて下さる、その佛のまことが静かに働いて下さるのであります。法藏菩薩の修業のところでも申しました『三昧常寂にして智慧無碍にまします』といふ味もそこにあります。静かなうちに、何時の間にか私の心をヒタヒタと満たす力がある、そこにお念佛があるわけであり、

先月以來毎朝歎異抄第六章と第十六章とを御和讃の後に拜読致して居りますうちに、今迄気付かぬことを気付かせて頂きました。第十六章に

『信心の行者自然にはらをもたてあしざまなることをもおかし云々。』

わろからんにつけてもいよく願力を仰ぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし云々。

ただほれんと彌陀の御恩の深重なることつねにおもひいだしまゐらすべし、しかれば念佛も申され候これ自然なり、わがはからはざるを自然と申すなり云々。』

同じ自然の二字なれども、最初の自然は似ても似つかぬ自然と存じます。これは本能主義の本能、自然主義の自然又は業報必至的自然とも申すべき言葉と存じます。後の二つは何れも自然法爾の自然と有難く頂きます。

歎異抄の著者が、ことさらに違ふ意味の自然を並記せられたのかどうかは存じませんが、自然に今頃の誤解せられたる自然法爾の解釈を御諭し下されまことは有難い極みであります。これにより先生の学舎建築と本能的虚栄事業とは自然法爾の味に宵壤の差異あることを深く御味ひ下さるやうに。

然しながら前に申し上げました通り、学舎建築の先生の眞意を理解せねば御慈悲が頂けぬといふ次第では決してあ

りません。むしろ理解出来れば出来ぬほど特に憫み給ふ如來の御慈悲なることは申すまでもありません。

学舎建築の事につき近角先生が大いに有田氏をせめられたること、若しさうであるとすれば、是れは先生の絶対的の境地から溢れ出られた御慈悲と存じます。昔鉄眼和尚が藏經出版の寄附を勧誘せられた事実と自力他力の区別はありとしても、先生の寄附勧誘は常に絶対の境地より溢れ出づる御慈悲なる事は決してお忘れないうちに銘記して下さい。さうでなければ折角の呵責慈悲(化身土卷の御言葉)もその甲斐がありませんと思ひます。

小生の如きはこの学舎建築の事より益々横超の味を深く味はせて頂き、弁護士職業上にも利益を頂きました。本年中には小生如き貧乏人が三千圓以上五千圓位の御寄附も出来る様に可相成かと相ひたのしみ居ります。(取らぬ狸の皮算用ではあります)

然しこれを目して現世利益を喜ぶものと誤解なきやうに願ひます。『顛倒の善果梵行を壞する』と申す聖語もありますこと、職業上の利益多きを喜ぶ如きは、直ちに梵行を壞する事となります故、この点は誤解なき様願ひ上げます。今年現世的に成功しても明年は乞食にならぬとは限らず、或は又この手紙を御覽にならぬ内に小生死去せぬとも

限らず、是等はすべて業報にさし任せて偏に御本願に信頼するのみであります。

「私が真に先生と同一信心をいただいて居るならば、先生のおやりになる事が理解出来ねばならぬと思ふのですがこの点文は理解出来ず、不審でたまりません」

とのお言葉、これはまた法兄の言葉とも覚えぬ御言葉です。斯様の言葉は、自分の信心で往生する様に思うて居る人の言ふことです。

前に申し上げました通り、先生の事業を理解すること能はざるものを憫み給ふお慈悲です。その御慈悲一つで往生させて頂くのです、その御慈悲一つで現世も渡らせて頂くのです。自分の信心で往生するのではなく、向上するのではないから信心の詮議は要らぬ事です。

勿論、内外父母の因縁と申して、光明と名号の慈父と悲母、真実信の業識、この内外の因縁和合して報土の真身を得証すと仰せられてありますから、真宗に於て信心の大切なることは申すまでもない事でありますが、その信心とは如來より賜はる大信心で、私共の詮議する所謂信心でない事は、法兄とくより御體験の通りです。この迷あらせじとの、第十九願、第二十願と仰けば、如來の御手廻しの周到なること、何と申してよろしきや、言葉も分りませぬ。若し第十八願だけならば、私の様な詮議すべき者はとても

安心出来ず、何時までも何時までも、親鸞聖人の信心と同一なりや、近角先生と同一なりやの疑問が問題となるかも知れませぬ。然るに佛かねて知ろし召して、第十八願の外第十九願、第二十願を建てて果遂せずば正覚を取らじと、御誓ひあらせられたる事なれば、私としてすこしも信心の詮議すべき要なく、只々如來弘誓の船に乗托して感謝の念佛を称へるのみであります。

「速に難思往生の心を離れ、難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓、まことに由ある哉」

と親鸞聖人が三願輸入の所を述べて居られますが、御同様、なか／＼分りませんでしたな。大井工場長も、分らぬ分らぬと頻りに質問せられましたね、御記憶ですか。

三願輸入の御文は意識で理解しようとしては理解出来ぬ文です。然し信仰の體験としては実に有り難い御文です。果遂の誓、まことに由ある哉。第二十願はよそごとではありませぬ。この疑深き私。詮議立て好きの私。信心を頂いたと腰を下さんとする私。拘泥しがちの私を飽くまで停滯せしめず、無上上の境地まで引き上げねば置かぬぞの御慈悲、実に有り難く、果遂の誓まことに由ある哉と、日に日に有り難く頂戴する次第であります。

或は法兄は近角先生の学会建築、及地方伝道御止めにつき、他人の批判を聞き、これを弁護せんが爲に、小生の意

酒見先生の御手紙

(承前)

求道学会建築の事、其の他近角先生の御行為中に充分に理解の出来ぬこともありとの御告白、御尤であります。親鸞聖人は法然上人に対し「上人の智慧才覚ひろくおはしますにひとつならんと申さばこそひがごとならめ、往生の信心においてはまたく異なることなし、ただ一つなり」と仰せられてあります。

近角先生の御事業を理解せずして御義理に寄附し、又は寄附の勧誘をするのは、信順ではなく、服従であると思ひます。たとひ先生の御事業の眞意を理解せずとも、先生の仰に信順して應分の寄附をなし、又は寄附の勧誘をなすのは、これは他力で、決して服従でなく、自力的な行為ではありません。

要は学会建築の趣旨を理解するや否やに非ずして、自然

西原禮藏

法爾の寄附、則ち信順の寄附なりや、又は服従の寄附、即ちお義理の寄附なりやによつて決すべき事と存じます。

小生は始め充分先生の御眞意を理解する能はず、只々先生の御言葉に信順して活動せしのみ、そのうちに漸次に先生の御眞意がわかつて参り、今日では略理解し得たと思ひますが、此後もすこしづつ理解を増して頂くこと、存じます。時には小生も先生の仰を理解せず、先生に対して議論を吹きかけたる事も度々ありました。

殊に政治問題に就いては、先生よりは自分の方が善く知つて居る積りで、生意気な議論を致したる事も御座います。一昨年、昨年、及本年は、幾度参上しても、講話以外の対談では殆んど御慈悲の話は無之、俗務の話のみにて、不満足で帰つたこともありました。然し先生の御話は政治上の

話でも其の他の俗務の話でも、悉く絶対の境地から溢れ出て小生を彼岸に御導き遊される大悲の光明にあらざるはなき事を気付かせて頂きました。それも一夜でさう味はせて頂くこともあり、一ヶ月、二ヶ月、もの後になつてアツと驚かせて頂くこともありました。時には先生はダダツ子のやうに無理ばかり仰せらるゝと感じた事もあり、時には老婆の様に冗々仰せらるゝと感じたこともありました。勿体ない限りでありました。後に到つて、そのダダツ子振りも、老婆振りも悉く是れ絶対大悲の光明なる事を味はせて頂いた時、漸汗背をうるほした次第であります。

煩惱障眼雖不見

大悲無倦常照我

大悲の御光明は煩惱成就の私の眼にはなか／＼見えないものであります。然も不断無倦に私を照して頂く事は疑もなき事実で御座います。

求道学舎建築に関する法兄の御意見、俗論として結構の御意見であります。それなれば日々の行事を左様に理窟詰めに行動出来ませうか。一寸家を出る、これは他力的か自力的か、又は道徳的か反道徳的か、或は又合理的か非合理的かと一一判断して行動されませうか。もしさうだとすると至極御窮屈の御事と存じます。従つて法兄の個性を矯め法兄生來の天稟を発揮する事は不可能と存じます。

自然法爾章には

見を問はれたのではありますまいか。若しさうだとすればそれは無用の御心配です。他人の非難など弁解なさる必要は寸毫もありません。さう云ふ弁解なさる時間があるならば、御互に親鸞聖人の御聖教や、近角先生の御講話を拜読し、其内より溢れ出づる大悲光明を仰がうではありませんか。

法兄は最後に「自己を省みれば何等の能力なし、鬼や角云ふ資格なし、非常識な我利的行動のみで暗澹たるものです」と仰せられました。実にその通りです。法兄や私のありのままの姿は実に無慚無愧です。然しそれを畏れるの必要はすこしもありません。

無慚無愧の此身にて まことの心はなげれども

彌陀廻向の御名なれば 功德は十方にみち給ふ

南無阿彌陀佛、々々々、と称名しながら、この穢れたる人生に活動する、亦楽しい事ではありませんか。

慈光はるかにかぶらしめ 光の到るところには
法喜を得とぞのべたまふ 大安慰を帰命せよ

既知未知の同朋方へ宜しく、殊にHさんYさんによるし

十一月四日

(大正十四年)

酒 見 忠 勢

西原 法 兄

待 史

「行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを自然とは申すぞとききてさふらふ」

と仰せられてあります。眞佛土巻には『從佛道遙歸自然』の善導大師の御文を御引用遊されてをります。この如くにして始めて私は天分だけを現世に於て尽し得ることが出来ます。

此学舎建築の事を小幡法兄が河村善益氏(前東京控訴院検事長、禅的人格者)に話されましたところ『それは近角先生の人格を損することになるから、お止めになる方がよからふ』と申されたさうです。

これは実に好意的忠告であります。ところが禪宗(堅超)と眞宗(横超)の異なる所であります。眞宗においても、無意味に無計画に無謀に学舎建築の如き事業を起すものはありません。先生は一事を為す毎に、深思熟慮、各方面の研究を遂げて後着手遊ばされます。着手後におきましては自然法爾に御進行遊ばされます。自然法爾とは無分別に盲動する事ではありません、又本能的に盲動することでもありません。自然法爾の深思熟慮と窮屈な深思熟考とは天壤の差であります。

近頃は親鸞聖人の自然法爾を自然主義の自然の様に、本能主義の本能生活の様に誤解する人があり気の毒至極に存じます。

笹井なみ法師の信味

四国

遠 山 カ ッ

昭和二十一年のお正月のことでありました。笹井さんがひとつの夢をみられました。

それは、何処か知らぬが広いお座敷に、近角先生のお育てを受けた方々ばかりが集つた求道会がありました。そこへ笹井さんが出席せられると、すこし遅れたので、もう一杯なので、上座からツート入ると、上品で優しげなお坊さんが坐つていらつしやる。その方が笹井さんを見られるなり「あなたは東京へ行つて来たといふがどんなぞやつたか」と問はれた。笹井さんはそこで

「東京へ行つて近角先生に角をあづけようとしたら『それはあづかれませぬ』と仰言いました。また角が云ふには『滅相なことを仰言いますな、あなたと私とは離れられるのですか』といつてついて戻つて来ました」

と答へられると夢が半ばさめて来て、それから寝言で「こは如何に、仇と思ひし人は皆、わがためには知識様々と言ひ終るとはつきり目がさめ、あゝ今のは夢じやつたとわかつたさうであります。然し夢とは云ひながら、角と自分との間が如何にも如才がなくて、何んとも言へぬ味ひを感得せられた由であります。

正信偈意譯

三 瓶 德 英

この讃越不遜なる拙文を、亡き母上と、亡き妻の追憶の記念に、せめて御命日に、佛前で読まうかと思つて綴りましたが、広大深遠なる祖意にそむくところが多いことで、五逆罪を犯し、謗法罪に當ることを覚悟しますが『本願圓頓一乘は、逆惡懺すと信知して』の御和讃を想ひ出し、皆様の御叱正を仰ぐことにいたしました。

建立無上殊勝願 たぐひなき 願ひをたてて
超発希有大弘誓 世に超へし 誓ひをおこし
五劫思惟之攝受 五劫の思惟 遂に人皆おさめらる
重誓名声聞十方 重ねての御誓ひ我名限なく透り聞へんと
普放無量無辺光 彌陀成佛の果徳
お光明、十二の功德、はかりなく、ほとりなく

總標 飯 仏

婦命無量壽如來 ナムアマミダブツ。

限りなき御いのちに帰依し奉る

南無不可思議光 ナムアマミダブツ。

不可思議の御光明に南無し奉る

依經 段

△彌陀 章

彌陀 因位 の 相

法藏菩薩因位時 法藏菩薩と名告り出でたまひ
在世自在王佛所 世自在王佛につかへたまひて
親見諸佛淨土因 ころもろの ほとけのみくに
国土人天之善惡 よきあしき 人も国土も みそなはし

總勸

△ 釈迦 章

本願名号正定業 本願のみ名こそは、さどりのたねぞ
至心信樂願爲因 どこまでも見捨てぬの御本願
成等覺証大涅槃 この世から 來世にかけて
必至滅度願成就 必ずさとらせんとの誓ひ成し給ふ

如來所以興出世 釈迦如來 世に出でませしは
唯說彌陀本願海 ただ彌陀の慈悲を説かんがためぞ
五濁惡時群生海 にぐる世のもろびとたち
應信如來如笑言 うけ奉れ如來のおまことを

能信 の 利益

お慈悲に氣付いてうれしい心ひとたび起れば

不斷煩惱得涅槃 煩惱生活のまま証りの世界に進み行く
凡聖逆誘齊廻入 いかなる人もお慈悲の中に入りぬれば
如衆水入海一味 もろもろの河水 海に入りて一味の如し
攝取心光常照護 おまことに 照され 護られて
己能雖破無明闇 心のなやみは 破られても
貪愛瞋憎之雲霧 ホシイ オシイ ニクイ カハイイの心
雲霧の如く わき出でて

常覆真實信心天 まことの信心を覆ひかくし消さうとする

譬如日光覆雲霧 たとへ雲霧の日の光を覆ひかくすとも
雲霧之下明無闇 日光は雲霧を透して 明らか照して下

獲信見敬大慶喜 さるにひとしい
信じ得て 見る事 聞く事 喜びのたね

即橫超截五惡趣 苦しい境地をも飛び超へさせていただく
一切善惡凡夫人 凡天われら よきも あしきも

依釋 段

△ 總 讚

印度西天之論家 西のかなた 印度の論師
中夏日域之高僧 支那日本の 高僧がた
顯大聖興世正意 釈迦佛のみこころつたへ
明如來本誓應機 彌陀の慈悲信ぜしめたまふ

△ 別 讚

龍 樹 章

釈迦如來楞伽山 釈迦如來 楞伽山 にて
為衆告命南天竺 もろ人にのたまはく。『南印度に
龍樹大士出於世 龍樹菩薩世に出でて
悉能摧破有無見 人々の浅き考へ打ちくだき
宣說大乘無上法 深く広いお慈悲をのべて

証欲喜地生安樂 智恵をすてはて、浄土を願ふ』
顯示難行陸路苦 陸路の歩みはくるしき
信業易行水道楽 船路の旅はやすけきぞ
憶念彌陀佛本願 おたすけのまことをうけたてまつれば
自然即時入必定 そのときにさとりぞ きまる
唯能常称如来号 ただ常にみ名をとなへて
應報大悲弘誓恩 限りなき御恩しのばん

天親 親 章

天親菩薩造論説 天親菩薩 淨土論を作りたまひ
婦命無碍光如来 彌陀佛に 信順したまふ
依修多羅顯真実 釈迦佛のをしへによりて
光闍横超大誓願 横とびの さとりを示し
広由本願力廻向 本願の御めぐみによりて
為度群生彰一心 すくはるる 一心帰命
帰入功德大宝海 広大なる 功德いただき
必獲入大会衆聚 菩薩大会衆の數に入れられ
得至蓮華藏世界 み佛の御宅に参らせていただき
即証眞如法性身 法性のさとりの家屋に住む身となれば
遊煩惱林現神通 煩惱界に入り、神通を以て助け
入生死國示應化 生死の境界に這入りて、有縁を救ふこと
が出来る

曇鸞 鸞 章

本師曇鸞梁天子 曇鸞大師は梁の王様が

善導獨明佛正意 善導大師佛の御本意を御述べなされて
矜哀定散与逆惡 よしあしにまよふ人々を憐れみたまひ
光明名号顯因縁 光明と名号の因縁を説き
開入本願大智海 彌陀佛の本願海に入らしめたまふ
行者正受金剛心 お慈悲聞き得し人は金剛の心を受け
慶喜一念相應後 うれしやのと思ひに願ひ叶ひて
與章提等獲三忍 喜びと 智恵と まこと 章提希夫と
ひとしくて

源信 信 章

源信広開一代教 源信僧都 広き佛教のすべてをしらべ
偏婦安養勸一切 彌陀佛のみ國を慕ひ人々に勧めたまふ
專雜執心利淺深 もつばらの一心は深く まじり心は浅し
報化二土正并立 報土と化土は信の相違のあらはれぞ
極重惡人唯称佛 罪深き惡人は皆彌陀たのみ
我亦在彼攝取中 われ救はれて光明の中に在りながら
煩惱障眼雖不見 煩惱の病に眼つづれて佛見へねど
大悲無倦常照我 可愛想との大悲は常に私をまもりま

源空 空 章

本師源空明佛教 源空上人一切経のそこをきはめられ
憐愍善惡凡夫人 いかなる人をも憐れみをしへ
眞宗教証興片州 眞宗念佛の教を日本に興行し
選振本願弘惡世 彌陀他力の救済を悪しき世に弘め給へり

常向鸞所菩薩礼 菩薩とおうやまひなされた高僧
三藏流支授淨教 菩提流支三藏に觀經を授かり
梵燒仙經歸桑邦 仙人長壽の經を燒きすてて 浄土の門に
入りたまふ

天親菩薩論註解 天親菩薩の論を註釈なされ
報土因果顯誓願 さとりを得るは彌陀の力ぞ
往還廻向由他力 往くも還るもみめぐみのたまものばかり
正定之因唯信心 さとらるるたねは 信心ひとつ
惑染凡夫信心発 惑ひ迷ふ我等もお慈悲を信じ得ば
証知生死即涅槃 生と死の苦しみを さとりの楽しみに変
らせて頂き
必至無量光明土 光明無量のお浄土に参らせて頂けば
諸有衆住皆普化 迷へる衆生を皆化益する事が出来る

道綽 綽 章

道綽決聖道難証 自力ではさとり難しと道綽禪師
唯明淨土可通入 唯他力のみ救はるる道ぞ
万善自力乾動修 萬善は自力でつとめつくせぬ
圓滿德号勸專称 お六字に救はれ 称へまつらん
三不三信誨感懃 ねんごろに教へて 深く信ぜしめ
像未法滅同悲引 末の世の我等を可哀想と思し召さるる
一生造惡值弘誓 一生造惡の者にお慈悲を聞かせ
至安養界証妙果 浄土に往生させ さとらせて下さる

善導 導 章

還來生死輪転家 生き死にの苦しみを逃れ得ぬことは
決以疑情為所止 彌陀佛のお慈悲を信ぜぬ為である
速入寂靜無爲樂 さとりの都の楽しみに入るには
必以信心為能入 信心頂きお慈悲の懐に入る外に道はない
弘經大士宗師等 尊き教を示し給ひし 七高僧
拯濟無辺極濁惡 限りなき私の濁惡を救はんとし給ふ
道俗時衆共同心 いつの時代のいかなる人も
唯可信斯高僧説 ただ高僧方の自利利他のおまことに従ひ
ませう
南無阿彌陀佛

眞信 尼 物語

或時、師の御教化に『目の形もなければ、鼻の形もなく
耳の形もなくヤケボタみるやうな罪人を御膝の上に抱き上
けさせられて、悲しからうがこらへて暮せ、熱からうがこ
らへて暮せ、彌陀の正覚取つた其時は、汝をさきがけに助
けてやるほどにと仰せられては、血の涙をホロリ／＼とお
こぼし遊された。其の涙のかかつた衆生が彌陀の本願に御
縁があるのぢやぞよ』と、これは眞信がいつも涙ながらに
物語る御教化の詞である (師とは一蓮院師)

編集後記

近角先生の御一週忌に御西下なさいます。この家へと御涙が申して居る。一度花田の御養中。その様親しく御晩年來下さいました。こと御涙のうちに御書斎に御書や、書き物、御健康を氣づかばれて居るから、御健康を自分退屈なことはすこしもない、これで行つて居るから、何なら、全活動のあるところ、日に退屈といふ影も新なるものがあつて、退屈といふ影も見えなものであります。御一代開きと書かないと、十年の間一日も退屈したことがなく、仰ぎまゐらすことであり、五月廿三日夜、西元宗助氏來庵、四、五人会合し、談論風発いたしました。その節、ロシヤ語に歎異抄が訳されてゐるとの噂もありました。

十一月三日、池山先生の忌を京都市右京区山田開町浄住寺、榊原徳草師の御苦勞で、午後営まれました。一心正念直來、オネガヒガカラ、スダキテオクレヨ、の先生の色紙を凸版で印刷した

し記念といたしました。御希望の方は慈光社へ御申し出下さい。

△福島先生は御移転中で、御移転先が未詳であります。

△酒見先生の御手紙を頂き、本月号もその徳音に接し得られました。西原礼蔵先生は、かねて心臓病で御療養中でありましたが、十月下旬から悪化せられ、心臓ゼンツクの苦しい発作を続けられながら、すこしよくなつたら酒見先生の遺稿集を出版したいと、心から念じて居る素懐をとけられ、十一月五日遂に往生の素懐をとけられ、稿正中に御令息、西原建様から御知らせを頂き、愕然として念佛裡に御別離を謹みて惜しみ、哀悼申し上げます。福岡県糸島郡前原東町が御宅であります。

△三瓶徳英師は島根県温泉津町井田に住せられ、長年煩はれました神経痛も手術で全快せられ、非常によろこばれて三又神経痛でシツコク悩まれる方は是非手術をうけられるやうにと申して居られました。

正信偈の意訳は長らく患はれて亡くなられた奥様に、すこしづつ意訳せられては御枕元に拜読され、遂に成し遂げられたものであります。従つて他に見せるといふよりもむしろ御夫妻で正信偈の文意をくだいて味はれる趣がかへつて私共には有難く読ませて頂きます。由来を誌して御礼といたします。

日曜講話案内

毎月 第一、第二、第三日曜 午後一時半

於、 一道会館

昭和二十九年十一月十日印刷
昭和二十九年十一月十五日発行

一部 十七円(郵税共)
定価 半年 百円(郵税共)
一年分 二百円(郵税共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編輯兼 花田 正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駄上町二ノ二八

一道会館

發行所 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光 第六卷 第十号 昭和二十九年十一月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物 可